

## 1対1オンラインレッスンの試み

新井潤・ファム ティ フーン オアン

### 1. はじめに

2020年初頭からの新型コロナウイルスの蔓延のため、突然の休校措置に世界各国の教育機関では試行錯誤が重ねられ、さまざまな取り組みが行われた。2020年8月現在、その取り組みの状況は、インターネット上でも盛んに共有されるようになってきている。国際交流基金ベトナム日本文化交流センターホーチミン執務室 JF 講座（以下、ホーチミン JF 講座）でも、開講中だった『まるごと』初中級（A2-B1）クラスを急遽休講とし、事態の収束を待つこととなったが、一向に収束の気配を見せないことから、オンラインレッスンに移行して対応することとなった。本稿では、このホーチミン JF 講座で実施した教師と受講者の「1対1オンラインレッスン」について報告する。こうした情報を共有し、蓄積していくことで、今後、同様の事態に陥ったときの措置として、他機関でもオンラインレッスンを開催する際の検討材料となることを願う。

まず、簡単にホーチミン JF 講座の背景について記述しておく。ホーチミン JF では、『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）を使った総合日本語クラスが常時3～4コース開講されている。受講者は、一般成人がほとんどで、時折大学生が参加することもある。受講者の多くは、年齢20代～40代である。一般社会人は学生に比べ、学習に充てられる時間が少ないという悩みを常に抱えている。各コースは3トピックごとに期末試験を実施し（『まるごと』は全9トピックで構成されている）、3学期制で開講している。学期ごとに編入者を受け入れている。そのため、受講者は『まるごと』入門（A1）からの継続者と、他機関からの編入者が混在している。話せるようになりたい、もっと話す機会が欲しいという希望を持つ日本語学習者の間では、ホーチミン JF 講座はコミュニケーション中心のクラスが開講されているということで知られているようである。また、編入者の中には、初級段階は『みんなの日本語』で学習し、その後も学習を継続するために JF 講座に来たという受講者もいる。ホーチミン市の民間教育機関で開講されているクラスは、初級段階のものが多く、中級レベルを学べる機関の数は多くない。

今回報告する『まるごと』初中級（A2-B1）クラスは、レベル的に『みんなの日本語』修了者に合っており、『まるごと』中級1、2（B1）への「つなぎ」のためにも最適な教材であるため、人気のクラスである。対面授業時、このクラスは週2回（1回2時間）開講し、1トピックを4回に分けて進行していた。インプット活動は授業内でも十分に行うため、強く予習を推奨し

## 1対1オンラインレッスンの試み

ているわけではなかった。今回、オンラインレッスンに切り替えるために大きく変更した点は、授業時間（1回30分、1トピック2回）と参加人数（受講者一人）である。授業時間を短縮したため、十分に予習しておくことを事前に伝えた。このオンラインレッスンの受講者は8名であった。

次節からは、2020年4月にホーチミン JF 講座で実施した「『まるごと』初中級（A2-B1）3期（トピック7～9）オンラインレッスン」について報告する。2節では「実施方法」について、3節では修了後の「アンケート結果」について、4節ではアンケート結果を踏まえ考察する。5節ではオンラインレッスン実施後に気づいた点について振り返り、まとめる。

## 2. 実施方法

### 2.1 事前準備

#### 2.1.1 使用機材

受講者が用意した機材は、パソコン（カメラ付き）、またはタブレット・スマートフォン、マイク付きのヘッドセット、テキスト『まるごと』初中級（A2-B1）である。そして、30分程度インターネットにつなぐことができる環境である。受講者は、ほとんど自宅から受講していたが、パソコンに有線で接続していたのは1、2名で、その他はスマートフォンの4G回線や自宅 wi-fi に接続し、受講していた。

#### 2.1.2 使用ソフトウェア

今回、実際にオンラインレッスンで使用したソフトウェアは「Google スプレッドシート」（スケジュール管理用、講師間の引き継ぎ用）とオンラインミーティングシステムである「Zoom (<https://zoom.us>)」（オンラインレッスン用）である。「Google スプレッドシート」は、オンラインで講師と受講者が共有することができ、変更内容を即時共有することもできるため、スケジュール管理用と、講師間の引き継ぎ用として使用した。「Zoom」は、受講者側がアカウントを登録することなく、指定された URL をクリックするだけで、オンラインレッスンに参加できるという手軽さがあるため、使用した。

#### 2.1.3 スケジュール管理

スケジュールは「Google スプレッドシート」を用いて、受講者が自分で受講する日時を決めることができるようにした。全曜日、9時から19時の間に8コマの時間帯を用意した。その結果、選択されたスケジュールは「土曜、日曜の午前中」「平日の夕方」の時間帯が多かった。

また、受講者がどの回にどの講師にするか指定できるようにもした。講師は日本語母語話者とベトナム語母語話者の2名で行った。質問や解説を重視したい受講者と、聞き取りや話す練

習を多く行いたい受講者と、それぞれ希望が異なることが予測されたからである。ただ、対面授業では積極的に話す受講者とそうではない受講者がいて、指定制にした場合、どちらか一方の講師（特にベトナム語母語話者）に偏ってしまうのではないかと懸念があった。しかし結果は、ベトナム人講師→日本人講師、または日本人講師→ベトナム人講師の順に指定する学習者がほとんどであった。なかでも、前半部分は会話練習が多く、後半部分は読解・文法練習が多かったため、前半の会話部分を日本人講師と行い、語彙や文法の質問がしやすいベトナム人講師を後半に選択し、練習するという選択をした受講者が多かった。

## 2.2 授業形態

### 2.2.1 1対1について

授業の形態を1対1にしたのは、受講者それぞれの能力や予習の進度に差がある上、複数名の受講者が参加する形式では、十分な練習を行い、30分で終了させるのは難しいと判断したからである。対面授業の時間を振り返ってみると、クラス活動でよくあるクラスメートの発表やQ&Aの際に、どうしても待たされる時間が生じてしまうことで、手持ち無沙汰になっている受講者がいることに気づかされていた。もちろん、他の受講者の発言を聞くことで、自分では気づかなかったことに気づくという学習効果も期待できるため、しっかり聞くようにと傾聴を促していた。しかし、オンラインレッスンでは、教室と比較して教師の目が届かず、画面の向こうの受講者の状況を把握しにくい。そのため、30分という時間を有効活用するために、1対1で集中して練習したほうが効果的ではないかと判断した。

### 2.2.2 1課の時間配分について

各トピックを二分割し、各回30分ずつ、1トピックを計60分で完了できるように設定した。30分以上のオンラインレッスンは、受講者の集中が続かないと予測したからである。通常の対面授業は2時間で行っていたが、8名の受講生に対して均等に時間を配分したとしても15分になることから、1対1の形式ならば30分でも十分に練習できると考えた。

### 2.2.3 予習と授業について

コースの目標は「理解度チェックのための音読練習と各種練習問題の解答、質疑応答を中心に進行し、最後にモデル会話から会話を発展させていき、Can-doを達成すること」とした。『まるごと』初中級（A2-B1）は大きく「じゅんび（トピックに関する語彙の確認と漢字練習）」「きいてはなす1・2（音声によるインプットと会話練習）」「よんでわかる1・2（読解と文法練習）」のように五分割することができる。このうち、予習として「じゅんび」と各練習問題は「事前に目を通し、音声も聞いて解答しておくこと」という指示を出しておいた。そして、各ト

## 1対1オンラインレッスンの試み

ピックの1回目の授業では「きいてはなす1・2」を、2回目の授業では「よんでわかる1・2」の解答の確認と各 Can-do のチェックをおこなった。スライド等画面共有は使用せず、双方の顔が PC の画面上に見えるようにし、テキストを見ながら進行した。

### 2.3 授業後

各授業終了後には、講師間の情報共有として、「Google スプレッドシート」で作成した引き継ぎノートに情報を記入していくことにした。引き継ぎ内容は、受講者の授業中の様子と授業環境の様子についてである。図1は、引き継ぎノートの一例である。

日にち	受講者	～回目	様子	その他
4月2日	A さん	1回目	かなり予習してきたので順調にいけました。	
4月4日	A さん	2回目	しっかり準備できてたので、30分で順調に進行できました。お互い30分がちょうどいいかなと思います。会話の復習もやりました。音声もたぶん聞いておいてくれたので、実際に聞かせなくても解答できました。実際に聞かせる時間はないかなあとと思います。他のみんなにも方法をシェアしておいてくださいと言っておきました。また、週末の予定がわかったら、スケジュールに入れておくと言っていました。	マイク付きのイヤホンを使っていて、声もきれいに聞こえていました。カメラもきれいに見えていました。
4月5日	B さん	1回目	語彙リストがまだダウンロードできていないので、意味を説明するのにちょっと時間がかかりました。また、準備不足なので、モデル会話までしかできなかったです。	→授業のあと、語彙リストダウンロードできたという連絡が来ました。

図1 引き継ぎノート（一例）

チームティーチングである上、対面で引き継ぎができない状況であったため、オンライン上の引き継ぎノートを活用することで適切に対応することができた。主に各トピックの前半の授業担当者が予習の状況や理解度など受講者の様子、さらに機材やインターネット環境について共有することで、後半の授業担当者が授業準備や各受講生のペースに合わせた進行を事前に考えることができた。

### 2.4 確認テスト

#### 2.4.1 筆記テスト

筆記テストは「Google フォーム」を利用して作成し、実施した。学習者の使用機材の関係上、長文の日本語を書き込むことは困難であったため、選択問題を中心に作成した。おもに、テキストにある練習問題を中心に「漢字の読み」「ことば、助詞選択」「長文読解」を出題した。成績は、100点満点中、58～96点、平均86点だった。

## 2.4.2 口頭試験

口頭試験は、8名の受講者を4人一組、2グループに分け、別々の時間に設定した。評価は授業を担当した2名の教師が担当した。通常の授業と同様に「Zoom」を利用して、オンラインで実施した。試験は2名ずつ行い、A → B → C → D → A という順番で、1名がおもに質問し、もう1名がそれに答えていくという方法にした。課題として、トピック7「いつもより元気がない友だちに声をかけましょう」、トピック8「空港でわからなかったアナウンスについてほかのひとに聞いてください」、トピック9「勤めている会社と仕事について聞いてください」の3つを課した。

各トピックの Can-do が達成できたかどうかを判断材料とし、3段階で評価した。付随事項として、言語的側面である「語彙や文法の使いこなし」「発音」「話すためのストラテジー」も3段階で評価した。

以下に具体的な手順を記述する。「Zoom」の機能である「ブレイクアウトルーム」を使用した。これは、メインルームとは別にサブルームを設定できる機能である。このブレイクアウトルームを3つ用意した。3つのブレイクアウトルームを使うことで、既受験者と未受験者の接触を防ぐことにした。

まず、全員をブレイクアウトルーム1に入れる。そして、そこから講師2名と受講者2名（1回目は受講者 A、B）は、ブレイクアウトルーム2（テストルーム）に移動し、そこで口頭試験を実施する。このとき、受講者 C、D にはブレイクアウトルーム1に残り、呼ばれるまでそこで待機するよう指示した（図2参照）。

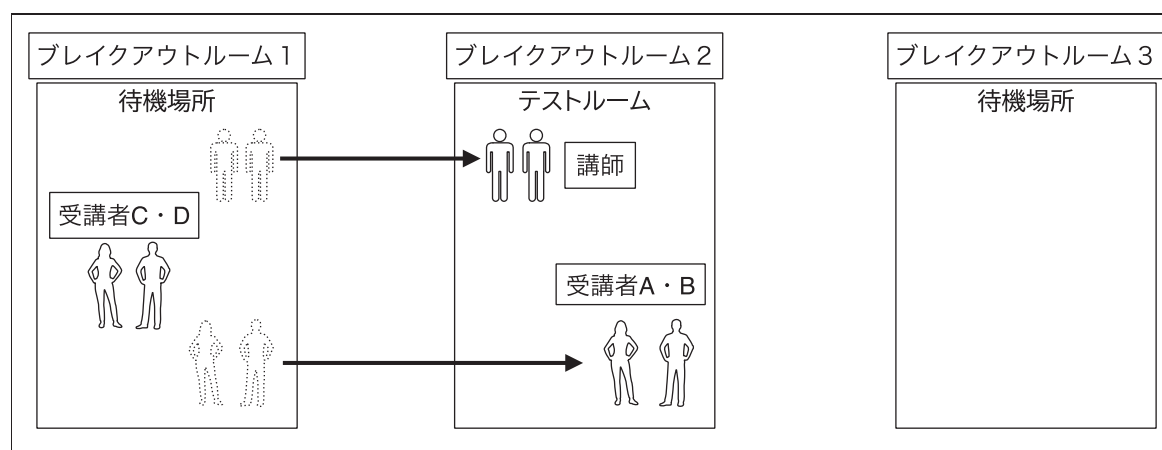


図2 口頭試験1回目

1回目の試験終了後、受講者 A をブレイクアウトルーム3に移動させ、そこで待機するよう指示する。受講者 D と A を接触させないためである。ブレイクアウトルーム1に受講者 D が残り、ブレイクアウトルーム2に受講者 C が移動し、受講者 B と試験を受け、ブレイクアウトルーム3で受講者 A が待機するという状態になる（図3参照）。

## 1対1オンラインレッスンの試み

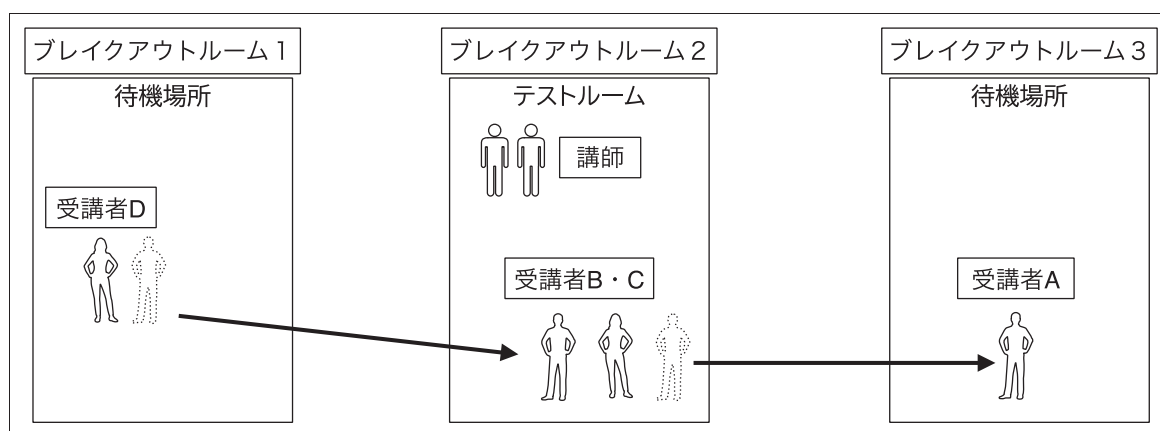


図3 口頭試験2回目

2回目の試験終了後、受講者Bは試験終了となり「Zoom」から退室する。続いてブレイクアウトルーム2に受講者Dが移動し、受講者Cと3回目の試験を受け、ブレイクアウトルーム3には引き続き受講者Aが待機しているという状態になる。3回目の試験終了後、受講者Cは試験終了となり「Zoom」から退室し、受講者Aはブレイクアウトルーム2に戻って受講者Dと4回目の試験を受け、全試験終了となる。

### 3. アンケート結果

以下は、オンラインレッスン終了後のアンケート結果である。

(1) 毎回、どのくらい「予習」をしましたか。

8名中8名が1時間以上と回答した。加えて、どんな予習をしましたか？という質問に対して、多い順に「教科書を読む」「教科書の問題を考えて、書く」「音声を聞く」「ことば（漢字）を調べる」「会話の練習をする」と回答した。

(2) 毎回、どのくらい「復習」をしましたか？

1時間以上が5名、30分ぐらいが3名だった。

(3) この授業（方法）に満足しましたか？

5段階評価で、4名が5（満足）、2名が4（やや満足）、2名が3（どちらでもない）と回答した。

(4) 30分の授業は長かったですか？

5段階評価で6名が3（どちらでもない）、1名が2（やや短い）、1名が1（短い）と回答した。

(5) 教師と2人でオンラインで勉強するのはどうでしたか？（複数回答可）

7名が「クラスのみながいなかったのが寂しかった」、6名が「たくさん準備をして大変だったが、上手になった」、5名が「楽しかった」、4名が「たくさん話せてよかった」と回答した。

(6) 会話テストはどうでしたか？（複数回答可）

5名が「うまく質問したり、答えたりできなかった」、5名が「緊張した」、3名が「質問はか  
んたんだったが、答えるのが難しかった」と回答した。

(7) 筆記テストはどうでしたか？

5段階評価で、2名が4（難しかった）、6名が3（どちらでもない）と回答した。

自由記述の部分は表1にまとめる。

表1 アンケート自由記述部分

Q1：この方法の良かったところを教えてください。
①勉強する時間は柔軟に調整できる。自律を高める。通う時間がかからない。
②移動時間が節約できる。Covid19の時には安全な対策。マンツーマンできる。
③時間は調整できる。学習者は積極的に勉強する。教師は学習者それぞれははっきり評価できる。
④自分で予習したら知識がしっかり把握できる。テキストに載ってある語彙・文法のほかにいろいろな知識が勉強できる。聴解・コミュニケーションの能力を高める。クラスに行かなくていい。
⑤自分で勉強しないといけない。(語彙・文法など自分で調べる時間をかけないといけない。)自分で勉強するのは時間がかかりかかりましたがそのおかげで発見したものも多かった。自分に合う時間帯を調整できる。日本人の先生と勉強するときには大変だが、それは日本語でコミュニケーションできる目的のためにいいことだ。
⑥自分で予習したり調べたりしたのでよく覚えています。自律を高める。教師とよく話して、わからないときには詳しく説明してもらった。
⑦つごうがいい時間を選べる。二人しかいないのでたくさん話せる。授業のために、準備することが詳しくてしなければならないです。
Q2：この方法の良くなかったところを教えてください。
⑧レッスンを長く覚えます。
⑨クラスメートに会えなくてやり取りが少なかった。予習・復習など大変だ。授業の質はネットの調子による。
⑩クラスメートとやり取りできない。グループ活動できない。ネットの調子が悪かったら大変だ。
⑪クラスメートがいない(先生方と友達に会いたい)。緊張感が高い(人とのコミュニケーションに苦手な私は言葉などよく忘れてしまった)。時間がちょっと少ない(でも、そのおかげで、いい効果が出た感じ)。
⑫クラスメートとのやり取りが少ない。自分のレベルとクラスメートのレベルに比較することができない。宿題も少ない。

## 1対1オンラインレッスンの試み

⑬クラスメートと先生に会えるのでクラスで勉強するほうが楽しい。この方法で勉強したら質問があるときは先生たちに説明してもらえますが質問がないときは（わからないことがあってもどうやって質問すればいいかわからないときもある）。そのまま済ませる（クラスだったら先生たちがクラスメートの質問に答えるときに自分も一緒に聞く）勉強する環境がなかったら怠けてすぐに諦めてしまう（この方法は自律が大事だ）。
⑭レッスンの準備には長い時間がかかります。時々、先生が話すことは聞きませんでした。
⑮ネットがよくない人にとってはこの方法はちょっと。。。クラスのみなになにに会えないです。授業のために、準備することが詳しくてしなければならないです。
Q3：コースについて、自由に書いてください。
⑯Covid19のときにいい解決方法だ。安全を守りながら勉強できた。
⑰先生方々の熱心のおかげで自分の日本語がよくなってきたと思います。長く休んでもクラス全員がコースをうまく終了したのでうれしかったです。
⑱今回は初めてマンツーマンでネットで勉強したので面白くて新鮮な感じでした。予習する習慣も鍛えられました。
⑲マンツーマンの形で勉強したおかげで、日本語でコミュニケーションするとき自信ができました。
⑳自分で勉強して漢字練習をさせられないので、漢字の読み方をひらがなにかけますが逆だったらできないです。文法について調べるときその文型だけではなく、似ているほかの文型もついでに調べました。しかし、そのときわかってすぐにもとめてメモしないと後数日また忘れてしまいます。
㉑先生とクラスメートと会いたいので、オンラインで勉強するのは好きじゃないです。
㉒コースについて、いろいろ新しい体験がありました。勉強するとき、すべては日本語で話したり、先生と2人だけで勉強したり、新しいテストの方法をしたりしました。 初めて、困るときにともだちに助けてもらえないで、自分でがんばらなければなりません。しかし、そんなことのおかげで、自分の日本語がよくなる感じしました。勉強するために、準備することがたいへんでしたが、詳しくわかることができました。

※原文ママ、受講生の記述を誤用も含め、そのまま掲載した。ベトナム語で記載された部分は、ベトナム人講師の日本語訳を記載した。

## 4. 考察

### 4.1 自律学習の促進

受講者の自律学習への意識が促進された。対面授業のときは、授業後に課題のプリント（語彙、漢字、文法、作文などの練習プリント）を配布していたが、多くの受講者はこの課題を提出するだけで、講師の観察からテキストの予習や復習は行っていなかったように見えた。しかし、1対1オンラインレッスンに移行した後は、全員が予習に1時間以上の時間をかけ、復習にもこれまで以上に時間を取るようになったと回答している（3. アンケート結果（1）（2）参照、



以下（結果：回答番号）のみで示す）。

対面クラスから1対1オンラインレッスンへ移行したことで、授業時間は1トピック8時間から1時間に減少したが、受講者は減少した授業時間を補うべく予習や復習を積極的に行い、1対1オンラインレッスンに取り組んだことが表1からも読み取れる。まず、受講者は予め内容をチェックしておかなければ、教師との1対1オンラインレッスンに対応できないということに気づき、事前に準備しておくという意識を持つようになった（表1の⑤参照。以下、表1の回答番号のみで示す）。また、クラスメートがいないことで、いざとなったときに助けてもらえないという心配からも、しっかり準備するようになった（②）。さらに、受講者が希望する日時にオンラインレッスンを指定できることにしたことで、計画的に予習や復習を行うようになった（③⑤⑦）。そして、通勤や通学の移動にかかる時間を仕事や学習に割り当てられ、時間的に余裕があったことも積極的に予習や復習を行った要因であると言えよう（①②④）。

自律学習に関して言うならば、1ヶ月しか1対1オンラインレッスンを実施できなかったというのが残念である。対面授業に戻ると「事前にテキストの音声を聞いておく」「文法問題を考えておく」などの予習や、課題をなかなか提出しないなど復習にも時間を取らなくなってしまった。再開した仕事との兼ね合いもあり、自律学習のための時間を確保することができなくなってしまったようである。

#### 4.2 1対1オンラインレッスンの効果

1対1だったので、受講者の話す時間が対面授業の時よりも増加した。そうしたことから、話すことに対して自信を持てるようになったという感想が多く聞かれた（⑱⑲⑳）。また、対面授業では、積極的に活発な学習者の影響を受けてしまい、発話スピードが速くなってしまう場面でも、1対1オンラインレッスンでは、受講者が一人だったため、講師側も一人一人の受講者のペースに合わせた進行ができた。そうしたことで、受講者側も対面授業の時よりも講師の言っていることが理解できるようになり、さらに自信をもって会話できるようになったようである（結果（5）および⑲）。

また、誰の助けもなく30分以上一人で乗り切る集中力、インターネットを介した音声をヘッドセットで聞き取る集中力を持続することは大変だったはずである。しかし、こうした経験も最終的には、受講者の自信につながったようである。アンケートの結果にも「二人しかいないのでたくさん話せる」「大変だったが、日本語でコミュニケーションできる目的のためにいいことだ」などの意見が見られた（⑦⑳）。

### 4.3 受講者不満点とその改善策

アンケートの結果、受講者の多くが対面授業の方を望んでいることがわかった (⑱⑲⑳)。しかし、それはオンラインレッスンに慣れていなかっただけではないだろうか。実際、このような状況が半年以上続いている2020年8月現在、受講者の職場でもオンライン上で会議などが行われ始め、オンラインミーティングシステムの扱いにも慣れてきている。ベトナム社会全体で、オンラインによるコミュニケーション活動に習熟していつている真っ最中であると言える。受講者もオンライン授業を重ねるにつれて、発言のタイミングなどの「間」の感覚などが培われ、発言が被ってしまったりせずに「間」を取って話せるようになってきたり、フィラーなどを使いながら「間」が空かないようにしたりするといった「話すためのストラテジー」も使用することができるようになってきた。

「先生とクラスメートと会いたいので、オンラインで勉強するのは好きじゃない (㉑)」という意見もあったが、この意見は、もともと対面授業から1対1のオンラインクラスに移行したために出た意見であり、オンラインレッスン形式への不満ではないと考えている。オンライン上で教室と同じような環境を作るのは困難だが、今回は情報共有の場を用意することで解決を試みた。受講者たちに SNS 上にグループを開設し、そこで自主的に情報共有をするように促した。受講者用の場所ということで、このグループに講師は参加しなかった。そのため、実際にどのようなことが話し合われていたのかは正確にはわからないが、受講者それぞれが自分たちが授業に参加したときの様子、例えばどのような活動をしたのか、そのためにはどのような準備が必要なのかなどが共有されていたようである。さらに、今回は実施できなかったが、週に1回程度、クラスメートや講師がオンライン上に集い、雑談するといった活動も行うことができたら、この不満点も解消されたのではないだろうか。

今回、受講者から寄せられた不満点は、総じて、なぜ「1対1オンラインレッスン」という形態にしたのかという点を受講者に十分に周知できていなかった点に尽きる。そもそも、長引く外出自粛期間の影響から、受講者たちからオンラインレッスン開講の要望はあったのだが、受講者たちはオンライン上に一同に集まり、いわゆる講義形式の授業が実施されることを想定していたようである。そうした受講者にとって、1対1のオンラインレッスンというのは予想外なことであり、予習や復習など一人一人の負担が増した。オンラインレッスンでは、実際には目の前に教師がいないため、予習していない、わからない点をそのままにしてしまうといった受講生や、オンラインレッスンでの学習を自身の日本語能力向上のために、どのように活用すればいいのか理解できず、あまり効果を感じていなかった受講者もいた。これは、自律学習に対する意識の差によるものであると考えられる。次回開催の際は、開始時点で十分なオリエンテーションを実施し、受講者の疑問解消の場を設けることで、解決を試みたい。

#### 4.4 講師の観察による気づき

1対1オンラインレッスンを実施し、日本語教師として改めて気づかされた点がある。それは「待つこと」の大切さである。受講者一人一人が反応できる時間には差があるため、受講者の発話を根気強く待つことは重要である。特に対面授業では、指名された受講者が答えられずにいると、他の受講者が答えてしまったり、そうしたことが続いて、指名された受講者が回答することをあきらめてしまったりすることがよくあった。しかし、今回の1対1オンラインレッスンでは、他の受講者がいないことで受講者も気を使うこともなく、ゆっくり考えることができ、講師も一人一人とじっくり向き合うことができ、実は詰まってしまったわけではなく、考えを巡らせているだけなのかもしれない、もう少し待てば答えられるのかもしれないと普通の授業よりも長く待つことを意識することができた。

ましてや、インターネット環境の影響でお互いにタイムラグが生じるオンラインレッスンでは、お互いの「間」を意識することが重要である。1対1オンラインレッスンでは、受講者と講師の二人しかいなかったため、お互いの様子を画面上で確認しながら、「間」を意識し、練習を重ねることができたことで、受講生からはスムーズとは言えないまでも、対面授業の時より、長く会話が続けられた、たくさん話せたという感想が聞かれた(⑦⑱⑳)。回を重ねることで、お互いにこの「間」に慣れ、最終的には気にならなくなっていった。そして、こういった環境下において、受講者は自分が発言しない限り授業が進行しないということに気づき、積極的に話すようになるという変化が見られたのも1対1オンラインレッスンの利点であった。

#### 5. おわりに

オンラインレッスンの需要は今後もさらに増えていくだろう。普段の日本語の授業だけでなく、現在、情報共有のためのセミナーやワークショップなど大人数を集める催しも開催しにくい状況にある中、こうしたものもオンラインで開催されていく流れになってきている。今後もホーチミン JF 講座では、本稿のような1対1形式から大規模なものまで、様々な形態のオンラインレッスンを企画し、実施していくことで講師、受講者共に経験を積み、今後に備えていきたい。

#### 謝辞

今回、オンラインレッスンを実施するにあたり、1対1の授業形式についてはカレル大学川島眞紀子先生、口頭試験の方法についてはキングサワード大学米田晃久先生にアドバイスをいただきました。御礼申し上げます。